

河野哲也 著
『いつかはみんな野生にもどる
—環境の現象学』

水声社 2016年6月 四六判 274頁 ¥3240 (税込)

皆川朋生

本書は環境哲学をテーマとして、著者が実際に自然環境と触れ合った経験をもとに生態学、現象学の理論を用いながらまとめられたものである。人間は最終到達点に至るまでの道すじを指し示すものとしての意味や目的を求める。本書ではそうした人間同士のなかで作られたものに過ぎない「志向性」(p.39)を求め、それに従う人間のあり方を問い直していく。

著者はマヤとアステカの遺跡を訪れる。古代のマヤでは共同体のために生贄となることは最高の名誉とされていたという。著者は生贄という形で自らの生と死を共同体のなかに溶かし込んでいくことで自らを意味づけようとするを考察する。

著者は、自然は無意味であるという。自然は人間のように方向性をもたず、志向性をもたない。ある一定の方向性をもたない自然はどんな目的にも奉仕をする全方向性をもっているのである。そういう意味で自然は無意味なのである。

また、著者はコルシカで行われた風土学のシンポジウムに参加した経験から、和辻の風土論の批判も行っている。和辻は風土を「人間の志向性によって意味づけられた自然」(p.192)と捉え直し、風土と社会の歴史とは不離のものであると論じている。和辻の風土論はしばしば地域の特徴づけが恣意的であると批判される。その批判とは別に、著者は和辻の『風土』には感受性豊かな記述があまり見られないことを指摘する。それは和辻が実際に地域の人々の生活には無関心で、観念的に地域の国民性を創作しているからだ論じ、そして和辻の『風土』に対して「この旅行記は一種の植民地主義的発想のもとに書かれてはいないだろうか」(p.200)と批判する。自らがもつ考えを変えることなく、その考えの中に現地の人々を当ては

めているのである。植民地主義的なのは和辻のみではない。自然を崇高なものとしたカントも、文化人によって選ばれた一部の自然を愛好する日本の伝統文化もある種の植民地主義なのである。

本書では和辻の風土決定論を乗り越えるものとしてベルクの通態性とトラジェクションの概念を取り上げる。通態性とは「主体と客体という理論上の極が具体的な現実を作り出すために相互に作用し合うダイナミズム」(p.205)であり、この通態性の運動をトラジェクションという。主体と環境は循環的な関係にあり、そして時間的に発展をしていく。ひとつの風土に複数のトラジェクションがあるときは生物文化多様性の考えに基づいてトラジェクションを選択するか、新たにトラジェクション創造しなければならないと述べる。

さらに本書では、放射能の現象学は可能かどうかについて論じている。放射能は機器を使った観測によって知覚し、そして「放射性物質に汚染された場所という背景と文脈のなかで」(p.235)知覚するのである。被爆した人間は、ちょっとした体調不良でさえもが被爆という原因と結びつけられる。原子力発電は、自然と人間を放射能という意味に閉じ込める。すなわち「この上なく豊かな無意味さを、この上なく貧しいひとつの意味へと還元してしまう」(p.255)のである。そして最後に著者は私たちの科学も古代マヤ文明と同じく「大量の犠牲を求める「文明」となっていないだろうか」(p.256)と問いかけるのである。

著者自身もあとがきにて述べているように、本書は「なによりも経験するということを重視」(p.271)している。著者自身の経験から思索が進んでいくこともそうだが、本書で取り上げられている思想家も実際に自然環境での豊かな経験に裏打ちされて思想を展開している。

評者は環境哲学を専門とはしていない。しかし本書を読んでいて難解だとは感じなかった。それはおそらく著者の「独創的な新しさを持ち、幾多の経験に支えられていて、しかも一般の人々に向けて書かれた哲学書が大切だと思います。」(p.274)という考えが本書に現れている結果であり、このこともまた本書の魅力のひとつであろう。